

京大現代文頻出テーマ「言語と文章」のレジュメ

作成者 中野 芳樹

京大では、過去三十年以上にわたり、言語、美術・芸術、文学、哲学・思想、歴史、文化・民俗など、**人文学分野からの出題が基本**であり、政治経済分野（社会科学）や自然科学分野からの出題は、ほぼ皆無と言ってよい。主に、

- ① 言語 話し言葉と書き言葉、日常語と文学、翻訳、言語と思考……
- ② 文章 実用と文学、散文（小説や論文）と韻文（詩歌）、現代と古典……
- ③ 書物 読むことと書くこと、読書と人生、書籍……
- ④ 芸術・美術 リアリズム（とアイデアリズム）、創造、虚構、想像、美……
- ⑤ 人間論・人生論 生、老、病、死、現実と人生（体験）、自然と人生……

を巡る内容の文章が繰り返し出題されている。これらは趣味的な文章などではなく、人文学の深い学識のある出題者によるものであり、現代文の学力の一要素として、京大国語はある程度の人文学的素養を前提としていと考えられる。しばしば表面的には軽いタッチの随想が出題され、しかもそこに深い思索に基づく学術的知見の含蓄を掬い取る**正確厳密な読解**と、**簡潔かつ的確な記述表現力**が求められている。

以下は、京都大学例年の本試験出題内容に鑑み（通常授業や講習においてもある程度の解説は行っているが）、出題内容のパターン分類を試みたレジュメである。

【1】 言語・言葉に関する様々な議論の概要

A そもそも「言語」とは何か

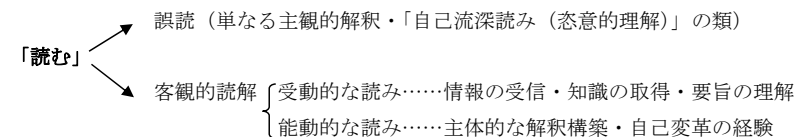
- ① いまだ言葉にならない精神のあり方＝前言語的状態
 - ・無意識、image の段階 → 夢・美術・音楽等、言葉以外の形象による「表現」
↓
- ② 言葉になる段階＝認識・判断・思考における言語
 - ・意識、世界を自然言語で分節・差異化して認識する（概念化・抽象的な分類）
＊言葉・記号による世界の分節・認識・概念化は、文化的差異と相關する

B 話し言葉と書き言葉との違い

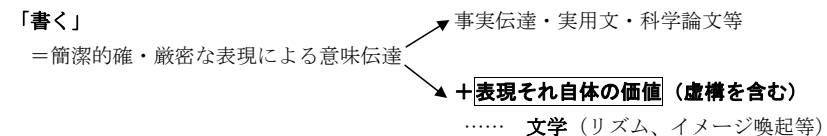
- ① 話し言葉・口語 spoken（ヒトの言語の始まり、日常的表現）
…… 語用・対話の現場（特定の相手と向き合つての言語使用）
即興・粗削り、未完成、リアルタイム

- ② 書き言葉・文語 written（文化・歴史・文明の始まり、日常的表現と文学的表現）
…… 読者（不特定多数、広域、匿名性）、推敲・洗練、完成、オンデマンド
＊言語の歴史の変容（文法・語義・用法等） 社会変動と言語変容の相關

【2】 「読む」ことと「書く」こと、日常的表現と文学的表現について



＊現代文の「正（しい）解（釈）」とは、上記「受動的な読み」を指す。もし各人各様でありながら「優れた解釈」があるとすれば、それは上記「能動的な読み」のみである。後者は、前者を前提として、その先へと進むことである。単なる誤訳を「意訳」と強弁できないように、少なくとも学問の領域では、客観的な読みをさしおいて主体的な読みなどありえない。



＊「デフォルメ」とは、正しいデッサンができる画家があえて変形することを言う。

【3】 文学・芸術の理念的対立（リアリズムを巡る諸問題）

＊「現実」をありのままに描写（^{リアリズム}現実主義）……現実（人情と世態風俗）の客観描写（自然主義や私小説 ← 芸術か？）



「理念・普遍性・創造性」（^{アイデアリズム}理想主義）……虚構を用い、単なる事実・現実ではない、真実・理想を追求

＊リアリズムは、「虚構」を非現実、嘘・誤りとみなし、「ありのままを客観的に表現せよ」という。他方、アイデアリズムの立場は、単なる想像やフィクションの礼賛ではなく、具体的、表層的な「現実」や「事実」ではなく、それらの真相としての「真実」を「理想」として描こうとする。「自然よりも自然的な、現実よりも現実的な虚構」の追求である。